

銀賞

新型コロナウイルスに負けない社会を目指して

横須賀学院中学校三年

高橋 亜実

2019年12月初旬に、中国の武漢市で第1例目の感染者が報告されてから、わずか数カ月ほどの間に、私たちをとりまく世界は一変しました。マスクをした生活が当たり前となり、ソーシャルディスタンスの確保やステイホームの徹底が当然のように叫ばれるようになったものの、私は新型コロナとは無縁の人間で、どこか別世界の出来事のようにとらえていました。もちろん帰宅後のうがい手洗いは徹底していたし、極力外出を控えて感染防止につとめてはいたものの、テレビで映し出される様々な映像が、非日常すぎて自分とは関係のない出来事のような感覚でいました。そんな私を変えた出来事が2020年12月末突然起こりました。

小さいころから勉強を教えてくれたり、いつもやさしく接してくれたりした叔父が、今年は年末年始に帰省することができず、私に会いに来られないかもしれないという電話をしてきたからです。叔父は高熱と咳があり、体調も悪く、新型コロナウイルスに感染したかもしれないと、少し不安そうな声で私に電話越しに話してくれました。いつもの風邪や体調不良であったならば、落ちついて気遣う言葉をかけられたのかもしれないけれど、その時の私は、ただただ新型コロナウイルスへの不安と恐怖心から、叔父に対して「絶対に我が家へ近づかないでほしい」といった冷たい言葉を浴びせかけ、一方的に電話を切ってしまいました。自分でもなぜそんな冷たい行動をとってしまったのか、その時には全く理解できず、ただただ身近な人間にさえも新型コロナウイルスの影響が迫ってきていることに恐怖を覚えるとともに、親族に新型コロナウイルス患者が存在したという情報が、もし流出して、私達家族へも批判やプライバシー侵害などの矛先が向けられたりしないかといった心配が胸をよぎり、心臓が締め付けられるような気分になりました。

その出来事があつてから、自然と私は新型コロナウイルスのニュースを食い入るように見るようになりました。また、自分自身でもインターネットやSNSを活用して、世界でどのようなとらえ方が人々の中でされているのかについ

て関心を持つようになりました。正しい情報を身に付けていけばいくほど、新型コロナウイルスという感染症に不安や過剰な心配をするあまり、私のような心無い行動をとってしまうケースが世の中にはびこってしまっている現実を目の当たりにするようになりました。

例えば、感染者に対する偏見や心無い批判はもちろんのこと、世界で発生した事例としては、感染していないアジア人に対しても、アジア人というだけで暴力事件が起こってしまったり、日本国内でも医療従事者に対して偏った情報から理不尽な偏見や心無いSNSでの誹謗中傷が後を絶たないということも知りました。また、そうした行き過ぎた正義感からくる差別が、社会秩序を乱し、医療崩壊を招くとともに、人の心を崩壊させていくことも知りました。本当に私たちが問題視して向き合っていくべきことは、新型コロナウイルスに対しての対策であつたり、感染者をいかに収束させていくのかといったことであるにもかかわらず、人間同士が傷つけあい、疑念や偏見から差別を繰り返して自らを崩壊させてしまっていることを痛感しました。

今もなお、新型コロナウイルスの感染者数は増え続けており、第五波の勢いが増している中、私は叔父との出来事を通じて、気づいたことがあります。それは、新型コロナウイルスという未知の感染症に対して、新聞やニュース、本などといった様々な媒体を通じて「正しい情報」を身につけ、冷静に行動していく必要があるのではないかとということです。あの時の私がそうであつたように、不安な気持ちや相手を疑う気持ちというのは、偏った情報や不確かな伝聞から引き起こされることが大半です。そうした不確かな情報に惑わされることで、恐怖心から心無い行動や言動、差別と偏見をもって相手を傷つけてしまう構図が、今もなお社会全体で生み出され続けているように感じます。むしろ今必要なのは、正しい情報を身に付け、冷静に行動を起こし、感染症と闘う人たちを温かい気持ちで受け入れて支援していくことにあるのではないかと私は考えます。今、私達人間ひとりひとりができること、それは、正しい情報をもってこの新しい社会を共に乗り越えていくことだと考えます。誰しもが感染する可能性があり、誰しもがこの感染症と闘う可能性がある社会で、適切な情報を活かしながら、深い絆を構築できる社会を実現できるよう、私自身もこれからさらに理解と知識を身につけ、明るい未来を築ける一人として成長していきたいです。